

盛岡市の景観イメージ分析

長 澤 由喜子*

(1991年10月14日受理)

緒 言

都市イメージの先駆的研究者であるケビン・リンチは、都市の景観の明瞭さあるいはわかりやすさ(legibility)が都市環境にとって決定的な重要性をもつ¹⁾として、都市環境デザインへのこの概念の応用可能性を示している。その中で彼は、環境イメージとは個々の人間が物理的外界に対して抱いている総合的な心象のことであり、現在の知覚と過去の経験の両者から生まれるものである²⁾とし、さらにそれをidentity(個別性)、structure(構造的性)、meaning(意味性)の3つの成分に分析し³⁾、identityとstructureの2側面を考察の対象としている。しかし近年、人間の環境に対するイメージは、環境からの情報を受容しつつ個人と環境との間において行われる相互作用として個人の価値に基づいて形成されるものであるという観点から、meaningに焦点をあてたいわゆる環境心理学的アプローチが注目されている。

本研究は、都市空間における心理的側面に着目し、盛岡市を対象として環境心理学的に景観イメージの心理量分析を試みるものである。建築計画分野においては、景観イメージの心理量に関連する多くの先行研究^{4)~9)}がある。しかし、地方都市における景観イメージが、在住者の過去の経験によっていかに異なるか、あるいは地域の象徴としての景観が地元出身在住者と他地域出身在住者ではいかに異なるか、すなわち在住者個人の過去の経験としての出身地とかわって形成される価値が、居住地域の景観イメージ形成に与える影響に関しては明らかにされていない。本報では、これらの事実を明らかにすることを目的とし、盛岡市の景観を対象として行ったSD法(Semantic Differential Method)による心理的実験に基づく検討の結果を報告するとともに、得られた知見に基づき、景観イメージ形成に関する若干の考察を行う。

研究 方 法

盛岡市は、現在および将来における優れた自然環境と歴史的環境が調和する個性豊かな都市環境を保全かつ創造することを目的とし、昭和46年12月には「盛岡市自然環境及び歴史的環境保全令」を制定し、さらに市民による景観づくりをめざし、昭和54年より5カ年計画による生垣1万メートル運動を補助制度により推進するなど、都市景観形成に市民と行政が一体となり総合的に取り組む姿勢を示している。また平成元年には市制100周年記念事業の一つとして、市民に愛され親しまれている風景・景観を「私のみつけた盛岡」というテーマのもとに市民に

* 岩手大学教育学部

広く募集することにより、「もりおか100景」の選定を行っている。これらの取り組みに対する評価として、昭和58年には潤いのある街づくり優良地方公共団体として自治大臣表彰を受け、さらに昭和61年に設けられた建設省の手づくり郷土賞を5年連続受賞、そして平成2年には「アメニティあふれるまちづくり優良地方公共団体」に選ばれ環境庁長官表彰を受けるなど、盛岡市の景観は全国的にも高いアメニティ評価を得ている。

本研究においては、盛岡市のこれら景観行政における事業の一環として行われた「もりおか100景」に基づいて刊行されたガイドブック『盛岡百景』¹⁰⁾の景観写真に着目し、それらを分析対象とすることとした。

(1) ことば対の作成

SD法の一般的研究手続きにしたがって、景観イメージを表現することば対を建築関連文献を中心として収集し、はじめに40対のことば対を作成した。さらに、『盛岡百景』の中から盛岡市を象徴すると考えられる典型的な写真を5枚選び、A4判の拡大カラーコピーを用いて7段階評定によるSD法の予備実験を行った後、最終的に表1に示す20対のことば対を選び出した。

表1 実験用ことば対

1. 自然な	—	不自然な	11. モダンな	—	古風な
2. すっきりした	—	ごたごたした	12. 個性的な	—	一般的な
3. 快い	—	不快な	13. 男性的な	—	女性的な
4. 新鮮な	—	ありふれた	14. 親しみやすい	—	親しみにくい
5. 安心な	—	不安な	15. 美しい	—	汚い
6. 生き生きした	—	生氣のない	16. 陽気な	—	陰気な
7. 都会的な	—	いなかっぽい	17. 情緒豊かな	—	情緒に乏しい
8. 開放された	—	圧迫された	18. おしゃれな	—	しゃれてない
9. 派手な	—	地味な	19. 好きな	—	嫌いな
10. 感じがよい	—	感じがわるい	20. 盛岡らしい	—	盛岡らしくない

(2) 実験対象景観の選定

本実験の景観選定にあたっては、盛岡らしさを前提として山・川・橋・緑・公園・情感・文化など盛岡の景観とかがわる諸要因をバランスよく含むよう配慮しつつ、『盛岡百景』の景観写真を中心として絵はがきなどの景観を加え、計21カ所の景観を選び出した。さらにことば対同様にA4判カラーコピーを用いた予備実験の後、最終的に図1に示す10カ所の景観を本実験に用いることとした。

(3) 実験方法

被験者は岩手大学学生男女各99名、計198名であり、出身地別構成は、盛岡市出身者・盛岡以外の岩手県内出身者・岩手県外出身者男女各33名である。本実験における景観の呈示には、実際の景観の臨場感を再現する意味においてその効果が明らかにされているスライド写真を用いた。実験手続きとしては、被験者に図1における1番～10番の景観各々のスライド写真を呈示して20対の形容詞対による7段階評定用紙に記入させた後、評定の再現性を検討することを目的として10番のスライドの後に1番のスライドを再呈示することにより、被験者の評定の信頼性のチェックを行った。



① 県営運動公園



② 岩手山



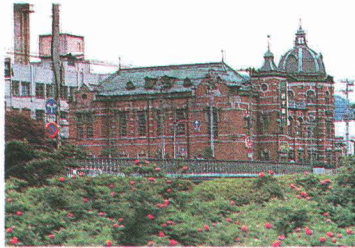
③ 岩手大学農学部資料館



④ 中津川白壁



⑤ 鍋屋敷の松並木



⑥ 岩手銀行中の橋支店



⑦ 上の橋



⑧ 寺町通り



⑨ 寺の下



⑩ 下の橋

図1 実験対象景観
（『盛岡百景』より）

実験期間は平成2年7月から11月である。

(4) データ処理

7段階で評定されたデータに対し、プラスイメージを高得点として1~7点の得点を与えることによって各景観ごとに各評定項目を数量化し、次のようなデータ処理を行った。

- ① 再現性の検討
- ② 各評価対象の平均SD得点および標準偏差の算出
- ③ 主因子法による因子分析
- ④ 平均SD得点に基づく因子得点の算出
- ⑤ クラスタ分析

以上のデータ処理は、岩手大学情報処理センターTSSによるSASを利用して行った。

結果および考察

(1) 評定の再現性

各被験者について再現性の検討を行い、1番目の呈示スライド評価と11番目のスライド評価の相関がきわめて低いものについては、データとしての信頼度が低いと考えられるため、これに該当する被験者のデータは棄却した。

(2) 平均値プロフィールによる分析

はじめに20対の形容詞対の各々の評定尺度が、各評定対象間に有意差(有意水準1%)をもたらす尺度であることを分散分析によって確かめ、各対象各項目ごとに全体・男女別・出身地別に平均SD得点および標準偏差を算出した。

a. 全体評価 男女別ではいずれの対象景観においても標準偏差にやや差が認められる程度で、平均値に差は認められないため、全体プロフィールによる検討を取り上げる。

図2に特徴的傾向を示す対象景観のプロフィールを示す。(実線は平均値、点線は標準偏差を表す。)運動公園は<すっきりした><快い><感じがよい>などの評価が高い一方、<地味な><一般的な>印象を与えており、岩手山は最も好まれる景観として全体的にプラスイメージへの偏りが認められ、<盛岡らしい>の評価がきわだって高い。岩大農学部は、男性に最も好まれる景観として<感じがよい><美しい>の評価が高く、全体的にプラスに偏る。中津川白壁は<情緒豊かな><盛岡らしい>が高い一方、<いなかっばい><地味な><古風な><陰気な>がきわだち、若者にとってはマイナスイメージが強い景観であることがわかる。鍋屋敷の松並木は<自然な><快い>、岩手銀行は<個性的な>、上の橋は<情緒豊かな><盛岡らしい>、寺町通りは<すっきりした>の評価がそれぞれ高く、各景観のイメージの特徴が表れている。また寺の下は中津川白壁と同じような傾向を示し、さらに下の橋は、得点4のどちらでもないに集中することから、印象が薄くイメージ形成上不利な景観であることがわかる。

b. 出身地別評価 岩手山では<好きな><盛岡らしい>の評価が盛岡市出身者で最も高く、同様に上の橋も<盛岡らしい>が盛岡市出身者できわだって高い。<盛岡らしい>の出身地による差は、岩手山に比較して上の橋の方が大きく、一方上の橋の<好きな>の評価は岩手山より低く、岩手山と上の橋では好みに対する出身地の影響の表れ方が異なる。

つぎに、上の橋と同じ建造物である岩手銀行の結果を図3によりみると、盛岡市出身者のイメージは明らかにプラスへの偏りが認められ、<好きな><盛岡らしい>いずれにおいても

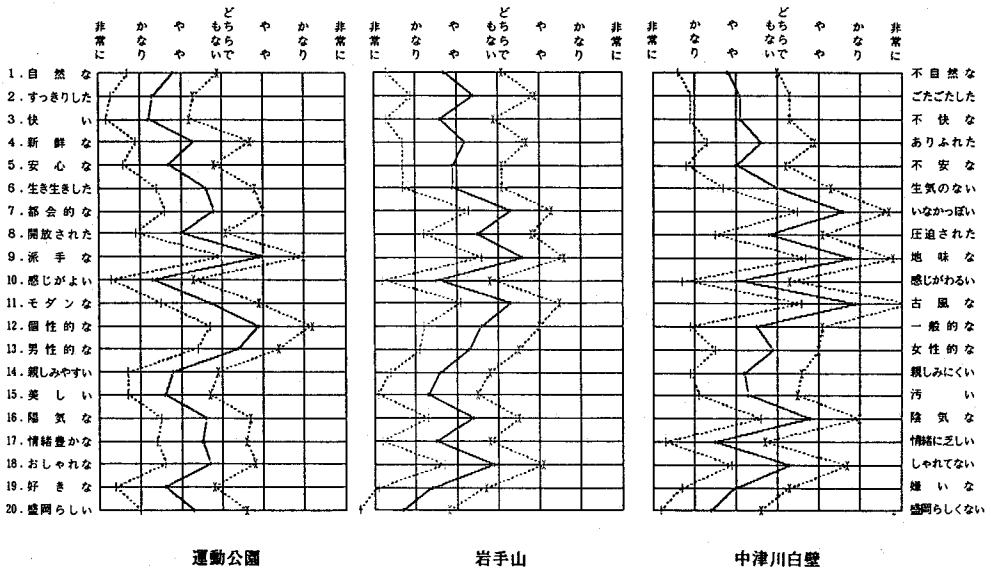


図2 評定プロフィール

実線-平均値
点線-SD値

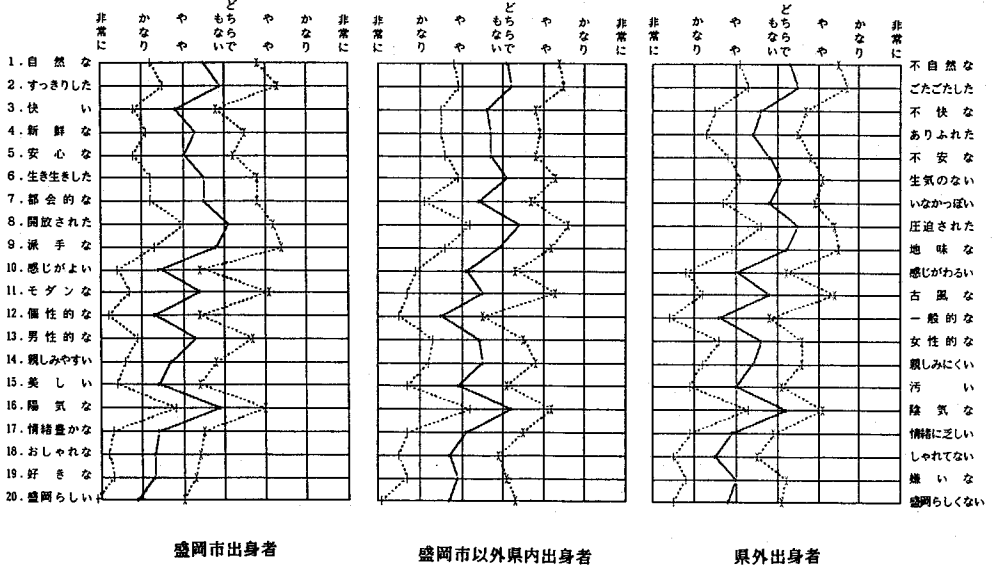


図3 出身地別評定プロフィール (岩手銀行)

実線-平均値
点線-SD値

盛岡市出身者の評価が高く、建造物ではあっても岩手山と同傾向を示す景観として位置づけられる。

また寺の下は、〈情緒豊かな〉において岩手県外出身者の評価が高くなっており、県外出身者の方が、隠れた街並みの情緒性を敏感に感知し評価している事実として捉えられ、観光客の心理評価に近いものが窺える。しかし、同じく情緒性評価の高い中津川白壁は、県外出身者の評価が他群に比較してマイナスに偏り、〈すっきりした〉〈快い〉〈感じがよい〉の評価がきわだって低いことから、崩れかけた白壁と市街地にあることによる背景建物の存在が、評価に影響していると考えられる。

運動公園、岩大農学部、鍋屋敷松並木、寺町通りおよび下の橋では、プロフィールにみる限り、出身地による評価への影響は明らかではない。

(3) 因子分析

各調査対象における評価項目の評価値を変量とし、主因子法による因子分析を行い、固有値 1.0 以上で規準化バリマックス回転を行った結果、3 因子が抽出された。

a. 因子負荷量および因子の解釈 バリマックス回転後の因子負荷量 0.4 以上の評価項目を各因子ごとに分類した因子行列を表 2 に示す。

第 I 因子は〈快い—不快な〉〈すっきりした—ごたごたした〉〈開放された—圧迫された〉〈安心な—不安な〉など、第 II 因子は〈情緒豊かな—情緒に乏しい〉〈盛岡らしい—盛岡らしくない〉〈好きな—嫌いな〉など、さらに第 III 因子は〈モダンな—古風な〉〈都会的な—いなかつぱい〉〈派手な—地味な〉などで表される。また〈感じがよい〉〈美しい〉〈親しみやすい〉〈好きな〉は第 I 因子と第 II 因子いずれの因子とも関連し、第 I 因子と第 III 因子との関連は〈陽気な〉、第 II 因子と第 III 因子との関連は〈おしゃれな〉のみに認められることから、第 I 因子と第 II 因子の関連は強く、第 III 因子は特殊な意味づけをもつ因子であることが明らかである。

これらの結果を総合し、第 I 因子は快適性の因子、第 II 因子は情緒性の因子、第 III 因子は洗練性の因子と命名した。第 II 因子は盛岡の景観の独自性を示し、第 III 因子は対象群の年齢とかかわると考えられる。

b. 因子得点

因子構造をより詳細に検討することを目的とし、全体および出身地別に各因子の因子得点を算出した。

全体傾向を概観すると、第 I 因子(快適性)の因子得点は、鍋屋敷松並木、運動公園、岩大農学部、岩手山の順に高く、緑占有率が高く建物が風景にとけ込み、全体的に明るい景観の得点が高くなっている。第 II 因子(情緒性)では、岩手銀行、上の橋、岩手山、中津川白壁、寺の下の順となり、盛岡の象徴的景観の得点が高く、盛岡の特色の薄い景観が低くなっている。さらに第 III 因子(洗練性)では、岩手銀行、寺町通り、運動公園、岩大農学部の順となり、洋風で近代的な雰囲気をもつ景観の得点が高く、前時代的雰囲気若若者に受け入れられにくい傾向を反映している。これらの結果から因子の解釈の妥当性を確認することができる。

出身地別因子得点を図 4-1、図 4-2、図 4-3 に示す。各対象景観の因子得点の特徴を出身地別に比較すると、盛岡市出身者の場合には、運動公園・鍋屋敷松並木の第 I 因子、岩手山・中津川白壁・岩手銀行・上の橋の第 II 因子、岩大農学部の第 III 因子が他群に比較して高い。すなわち、盛岡市出身者は緑量の多い景観により快適性を、そして盛岡の象徴的景観により情緒性を認め

表2 因子負荷量

因子	評 定 項 目	因子負荷量			共通性	因子の解釈
		I	II	III		
I	快 い — 不快 な	.802	.286	.079	.740	快 適 性 Comfort
	すっきりした — ごたごたした	.755	.011	.065	.597	
	開放された — 圧迫された	.717	.031	.112	.532	
	安心 な — 不安 な	.711	.347	-.007	.627	
	自然 な — 不自然 な	.693	.174	-.263	.586	
	生き生きした — 生気のない	.671	.209	.213	.574	
	感じがよい — 感じがわるい	.664	.520	.132	.750	
	美しい — 汚 い	.623	.503	.209	.686	
	新鮮 な — ありふれた	.614	.194	.132	.516	
	親しみやすい — 親しみにくい	.582	.566	.051	.672	
好き な — 嫌い な	.566	.657	.108	.769		
陽気 な — 陰気 な	.508	.094	.526	.549		
II	情緒豊かな — 情緒に乏しい	.294	.738	-.119	.663	情 緒 性 Affection
	盛岡らしい — 盛岡らしくない	.115	.710	-.047	.521	
	好き な — 嫌い な	.566	.657	.108	.769	
	親しみやすい — 親しみにくい	.582	.566	.051	.672	
	個性的な — 一般的 な	.006	.564	.127	.563	
	おしゃれな — しゃれてない	.224	.535	.511	.599	
	感じがよい — 感じがわるい	.664	.520	.132	.750	
美しい — 汚 い	.623	.503	.209	.686		
III	モダンな — 古風な	.050	-.052	.820	.683	洗 練 性 Refinement
	都会的な — いなかっぼい	.056	.010	.816	.669	
	派手な — 地味な	.003	-.037	.783	.644	
	陽気な — 陰気な	.508	.094	.526	.549	
	おしゃれな — しゃれてない	.224	.657	.511	.599	
寄与率 (%)	因子別	43.1	24.8	21.8		
	累 積	43.1	68.9	90.7		

て盛岡らしさを感じ、さらに岩大農学部 of 建物により洗練された雰囲気を感じていることがわかる。また、岩手銀行に対する盛岡市出身者の高い評価は、建物の文化財的価値評価が、先入観として評価に影響していると考えられる。

盛岡以外県内出身者の場合には、岩手山が盛岡市出身者、岩手銀行が岩手県外出身者と同じ傾向を示すが、他の対象景観については盛岡市出身者と県外出身者の中間的傾向を示し、独自の傾向は認められない。

さらに岩手県外出身者の場合には、寺の下の第 II 因子が他群より高く、岩手山の第 I 因子・第 II 因子、上の橋の第 II 因子、岩大農学部・岩手銀行の第 III 因子が他群より低い傾向を示す。県外出身者は盛岡市出身者と異なり、盛岡の象徴的景観に情緒性を認める割合が低く、むしろ古風で落ち着いた雰囲気を情緒性とし、それを盛岡らしさとして捉える傾向が認められる。岩手山は、県外出身者にとって県内出身者ほど快適性や情緒性をイメージさせる対象ではなく、岩

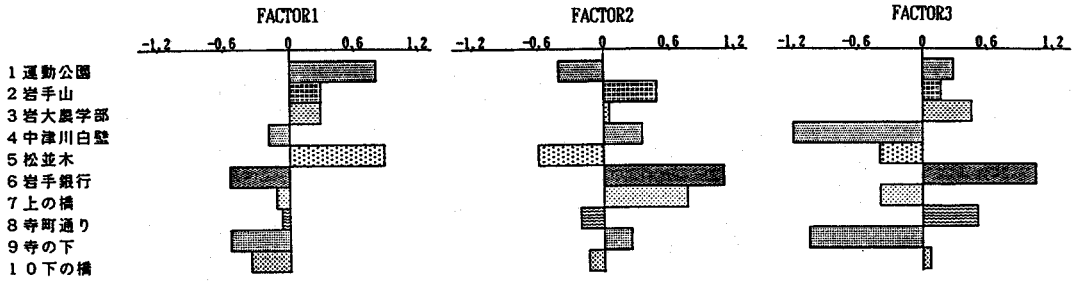


図 4-1 因子得点 (盛岡市出身者の場合)

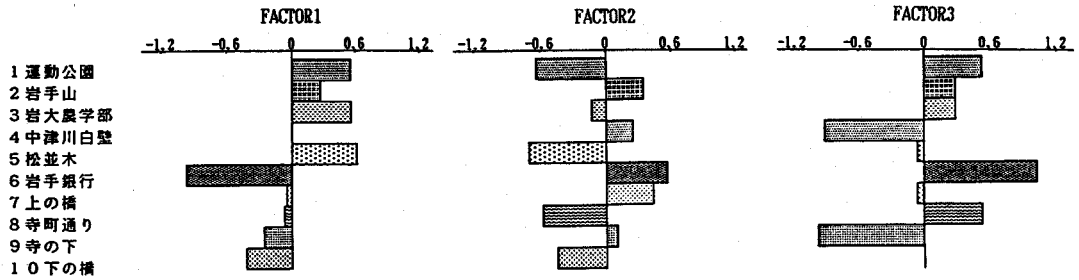


図 4-2 因子得点 (盛岡市以外県内出身者の場合)

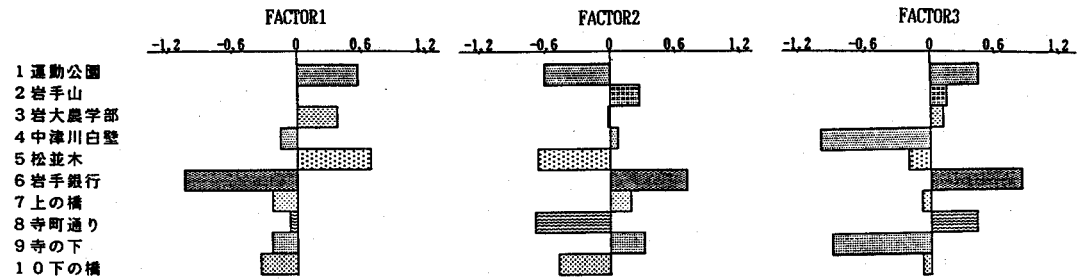


図 4-3 因子得点 (岩手県外出身者の場合)

大農学部は、盛岡市出身者が建物の洗練性を評価しているのに対し、県外出身者は全体的に快適性イメージを誘う対象として評価している。岩手銀行では、文化財的価値が意識されていない限り、若年齢者にとってはプラスイメージを誘う対象とならないことを確認できる。

(4) クラスタ分析

さらに各対象景観のグルーピングを目的とし、因子得点を外的基準としてクラスタ分析を試みた。本報では、クラスタ数が比較的少ない段階でクラスタの大きさに偏りが少なく、各階層においてクラスタ内の変動を小さくする WARD 法を用いた。

クラスタ分析を出身地別に行った結果得られたデンドログラムに基づくクラスタの融合過程を図 5 に示す。クラスタ数 5 の段階で出身地別に比較すると、岩手銀行が単独でクラスタを形成し、中津川白壁と寺の下の情緒的景観群が 1 つのクラスタを形成する点が共通し

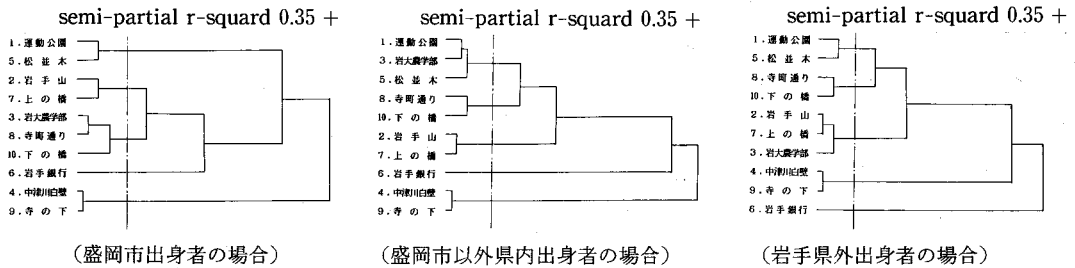


図5 クラスタ分析融合過程

ている。そして各出身地群において異なるのは、岩大農学部の位置づけであることが明らかである。すなわち、盛岡市出身者の場合には、岩大農学部は、寺町通りと下の橋が形成するすっきりしているが特徴のない没個性的景観としてグルーピングされ、資料館である建物の評価が優先していると考えられる。また盛岡以外県内出身者では、運動公園と鍋屋敷松並木で構成される緑量の多い景観としてグルーピングされている。一方、県外出身者の場合には、岩手山・上の橋に類似する風景としてグルーピングされている。すなわち、岩手山および上の橋は、建造物としての橋と自然としての川が融合した風景として評価され、一方岩大農学部も、建造物としての建物と自然としての緑で構成され、それらが異和感なく融合した景観を形成している意味において、他の2つの景観と共通すると推察される。同じ景観における出身地による評価視点の相異に注目することができる。この点に関しては、アイマーク・レコーダによる実験や瞬間視実験¹¹⁾などの検討による確認が必要となろう。

総 括

空間イメージ研究の一環として、景観評価の高い盛岡市における景観を対象として取り上げ、岩手大学学生を被験者として、環境心理学的側面からSD法を用いて心理量分析を試みた。対象学生出身地別分析を軸として得られた結果は、以下に要約される。

(1) 主因子法による因子分析により3因子が抽出された。第I因子(快適性)では、緑量が景観の快適性と大きくかかわることが確認され、第II因子(情緒性)では<盛岡らしい>と<情緒豊かな>の関連から、都市としての盛岡のイメージに情緒性が深くかかわっている事実が認められた。さらに第III因子(洗練性)では、若年齢層のファッション志向が景観イメージにも反映している事実を捉えることができた。

(2) 出身地別クラスタ分析の結果、岩大農学部の位置づけが各群で異なり、盛岡市出身者では没個性的景観、盛岡以外の岩手県内出身者では緑豊かな景観、そして県外出身者では建造物と自然が融合した景観としてグルーピングされ、同じ景観における評価視点の相異が明らかとなった。

(3) 盛岡市を象徴する景観として位置づけられる岩手山、上の橋、岩手銀行は、盛岡市出身者による評価が高い。

(4) 岩手山や上の橋の評価視点は出身地により異なり、盛岡市出身者の場合には岩手山やぎぼしを含めた橋そのものを評価するのに対し、岩手県外出身者の場合には建造物と背景の自然の位置づけが客観的になされていると推察される。

(5) 岩手銀行のような文化財としての建物を含む景観の評価は、価値意識が先入観として評価に影響を及ぼすことが明らかとなった。

(6) 岩手県外出身者は、盛岡の象徴的景観より、むしろ隠れた落ち着いた街並みに盛岡の情緒性を感知する傾向が認められた。

以上、都市景観のイメージ形成におよぼす出身地あるいは在住期間の影響を一部明らかにすることができた。在住地の景観を象徴する対象物は、地元出身者には評価視点すなわち「図」となりやすく、空間の心理的評価のプラス評価を促す要因として、親密度あるいは愛着度の存在を確認することができたと考える。

わが国における都市景観は、街路に突出した袖看板が第二次輪郭線を形成している¹²⁾と言われ、それらが混沌とした都市景観のイメージを形成する決定的要素になっている。このような状況を社会的背景とし、西欧諸都市とわが国の都市の景観に関する比較研究がなされる中で、西欧諸都市における人間的尺度による街づくりが注目される¹³⁾一方、わが国の歴史的都市におけるコミュニティ研究においても、同様の人間的尺度による街づくりが指摘されている¹⁴⁾。人間的尺度とは、スケールにおける問題にとどまらず、コミュニティ形成の核となるべき愛着を育む環境のあり方を指している。親密あるいは愛着は、人と人、人とモノの心理的距離として捉えられ、景観イメージの形成における親密あるいは愛着の存在に、人々がふるさとに対して抱くイメージ構造¹⁵⁾の一端をみることでできるとするならば、生活者にとっての空間の快適性とは、まさに人と人、人とモノとの適正な心理的距離の問題として捉えられよう。物理的かつ心理的な人間的尺度に基づく空間の快適性を導く街づくりにおいて、この親密あるいは愛着が一つのものさしとして位置づけられる必要があることを再認識したい。

最後に、因子分析に関してご助言を戴いた奈良女子大学家政学部教授梁瀬度子先生に厚くお礼申し上げますとともに、本テーマを卒業研究として取り上げ、資料の収集および整理にあたった岩手大学教育学部平成2年度卒業生中川雅子さんに深く感謝の意を表する。

引用文献

- 1) ケビン・リンチ (丹下健三訳) 『都市のイメージ』 (岩波書店, 1968), p. 3.
- 2) ケビン・リンチ 『同上』, p. 5.
- 3) ケビン・リンチ 『同上』, p. 10.
- 4) 岡島達雄, 渡辺勝彦, 野田勝久, 若山 滋, 内藤 昌「建築空間のイメージ分析」 (『日本建築学会論文報告集』第357号) pp. 80~87.
- 5) 若山 滋, 市川健二, 岡島達雄, 菅 雅幸「建築構法を表現する形容言語の分析—建築構法のイメージ分析 (その1)」 (『日本建築学会論文報告集』第386号) pp. 62~70.
- 6) 谷口汎邦, 松本直司「住宅地における建築群の空間構成と視覚的効果について—建築群の空間構成計画に関する研究 (その1)」 (『日本建築学会論文報告集』第280号) pp. 151~160.
- 7) 船越 徹, 積田 洋「街路空間における空間意識の分析 (心理量分析)—街路空間の研究 (その1)」 (『日本建築学会論文報告集』第327号) pp. 100~107.
- 8) 船越 徹, 積田 洋「街路空間における空間構成要素の分析 (物理量分析)—街路空間の研究 (その2)」 (『日本建築学会論文報告集』第364号) pp. 102~111.
- 9) 船越 徹, 積田 洋「街路空間における空間意識と空間構成要素との相関関係の分析 (相関分

- 析)一街路空間の研究(その3)』(『日本建築学会論文報告集』第378号) pp. 49~57。
- 10) 盛岡市編『盛岡百景』(山口北州印刷, 1990)
 - 11) 奥俊 信「瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析」(『日本建築学会論文報告集』第321号) pp. 117~124。
 - 12) 芦原義信『街並みの美学』(岩波書店, 1979), pp. 108~124。
 - 13) 芦原義信, 同上, pp. 63~68。
 - 14) 島村 昇, 鈴鹿幸雄『京の町屋』(鹿島出版会, 1971), pp. 50~52。
 - 15) 樋口忠彦『景観の構造』(技報堂出版, 1975), p. 156。